

放射能災害下の保育からの学び

関口はつ江

(大学教員)

大人の庇護ひごの下にある子どもたちにとって、生活の場が心身ともに安心できる場であり、その子らしさが十分発揮でき、それが認められるために、大人にできることはどのようなことでしょうか。東日本大震災による放射能災害下で暮らす家族や保育関係者の決断や気付き、子どもの育ちの姿の例は、子どもの居場所に何が必要かについての大切な示唆を含んでいると思います。

大人の覚悟と連帯〜今の状況に向き合う〜

放射能低線量影響下にいる家族は、「そこは子どもがいてよい場所か？」という根本問題に答えられないまま子育てを続けています。今のところ幸いにして健康被害は大きくないとされていますが、将来を含めた安全・安心の保証がないままの暮らしをどう支えてきたのでしょうか。二〇一一年七月の幼稚園保護者への調査で、親は子どもについて、情緒の安定や身体活動に負の影響があるものの、思いやり、我慢する力、家事参加、生活習慣にはプラスの傾向を認めています。その背景として、親としての覚悟と、子どもを守る協力者(園)との

関口はつ江(せきぐちはつえ)
東京福祉大学社会福祉学部保育児童学科教授。郡山女子
大学短期大学部保育科(附属幼稚園長兼務)、鶴見大学
短期大学部、十文字学園女子大学を経て現職。

連帯の意識が、自由記述の中に読み取れます。「避難できる場所があるのにどうしてしないの？」と友人や親類に聞かれる都度、家族が離れ離れにならずにこちらで過ごすことを決めた私たち親の判断は間違っているのだろうか？（と自問する）「今の線量で外遊びを制限するほうが、子どもの体にはよくないと思います。放射能に関しては個人差があるので、他のお母さんには慎重に話します。意識の差がある方のお子さんとは遊ぶ機会が減って、子どもたちは寂しそうです」と葛藤を抱えながら、「震災で嫌なことが多い反面、子どもの意外な成長を発見することができました。自分から洗濯物をたたんだり、……自身で歌を作ったり、遊びを考えて遊んでいます。前の生活だったら見逃してしまう様な小さな発見もありました。外で思い切り遊ばせてあげたいと思いますが、今の生活をできるだけ楽しみたいと思います」「家族で過ごせる幸せや、幼稚園に毎日通える幸せを改めて確認できたように思います。一緒にいられる時間を大切にしたり、やりたいことはなるべく近い時間に完結させたり（先延ばししない）、限りある命や時間やかかわり合いを意識しての生活です」等。そこには共通に、園の先生方の骨惜しみのない毎日の除染活動、保育の工夫や安全管理の徹底への感謝や信頼感が述べられています。^{注2}

保育活動の選択　～安全・バランスか、個々の子どもの経験か～

保育現場では、これまで経験したことのない厳しい条件の中で、子どもの生活の安全とともに調的かつ主体的な発達を目指さなければならぬという、難しい保育実践の経験を通して、保育者は以下のような実感を述べています。

「災害の年は、放射能（災害下）だから戸外遊びができなかった、ではなく、この年はかけがえのない一年だったとなるようにと、和太鼓の活動を積極的にとりいれ、地域との一体感も深まって、子どもたちもよく頑張り、保護者からも感謝され、子どもも大人も達成感を味わいました。しかし、一年たってみて、それは子どもの本当の姿だったのだろうか、大人の自己満足ではなかったかと考え始めました。子どもたちが自由に動けて、好きなことができる生活経験がない中で、太鼓は、子どもにはやらされた活動で、本当に子どもがやりたいことだったのか。この気付きは平常時には意識されないものでした」「戸外活動が制限される中で効率的に運動能力を伸ばそうとすると、室内の環境設定や活動は保育者主導になります。子どもたちは熱心に取り組んではいても、それは自己活動をもって挑戦する機会を奪いかねないし、個人的な活動の発想は出にくくなります」^{注3}「子どもにとって戸外活動の放射能リスクは大きく、外遊びをしない問題も大きい。走り回らないことでの体力や筋力の低下、自然物、生き物とのかかわり不足など。極端に言えば遺伝子破壊の危険をとるか、発達途上の生活経験を後回しにするか、どちらかを正解とする情報がなく、答えが出せないのです。例えば三十分の外遊びができたとして、鬼ごっこでタッチされて鬼になって、次に『つかまえるぞ』と勢い込んでいる時に部屋に入らなければならぬという、そんな中途半端な経験をさせるために、遺伝子破壊するかもしれないリスクを背負うかどうか難しいところだ」^{注4}

自分を取り戻す場所と時間

放射能災害下では、大人はとらえどころのない不安を抱え、子どもを守ろうとする意識が

強くなります。多かれ少なかれ戸外にいることの制限によって屋内活動が増え、親や保育者の視界の中での活動になり、活動の共有や相互関係も育ちやすくなります。活動は工夫されました。けれどもそれは子どもにとって他者を意識せざるを得ない環境でもあり、自分で判断して独自に行動することのできにくい環境でもあります。「時間」と言われればすぐに戻り、「そこは駄目」と言われれば決して行かないような、これまで見られなかった子どもたちの聞き分けのよさは、そうならざるを得ないとも言えます。「自分の思いを突き詰めるような遊びができない」「子どもの際立った特徴が出てこない」との保育者の意見からも、子どもが自分を発揮するためには、他者から解放されて自分に集中したり自分を調整したりする時間、自分がよくわかって自由に動ける場所も必要であること、戸外活動の重要性が一層浮上してきました。子どもは、大人がそこを生活の場所と定めた所を、大人への信頼感によって受け入れ、そこに合わせて育とうとします。現代の都市化社会で生きる子どもの居場所には、大人の手の内に入りきらない部分の持つ役割への配慮が特に求められるのではないのでしょうか。

注

- 1 「原子放射線の影響に関する国連委員会報告」二〇一三年
- 2 日本保育学会「災害に生きる子どもと保育」災害時における保育問題検討委員会報告書 pp.101-104
二〇一三年
- 3 日本保育学会企画シンポジウム「鼎談放射能災害下における保育のこれまでとこれから」配布資料
二〇一三年
- 4 郡山市保育園長への聞き取り調査 二〇一四年